

## 学生時代の交流を基盤としたネットワークの活用 Utilization of the network based on exchanges in graduate student days

○越山 直子  
KOSHIYAMA Naoko

### 1. はじめに

農業土木を学ぶ学生の多くは、官公庁、教育・研究機関、コンサル、農業団体など、専門知識を生かした就職先を選択すると思われる。筆者も例外ではなく、土地改良区の技師を経て、現在、研究員として独立法人研究所（平成27年4月からは国立研究開発法人）に勤務している。学生時代は意識していなかったが、同じ農業土木分野でも所属先によって、求められる役割や立ち位置が異なる。こうした立ち位置の違いを理解することは、地域づくりや研究成果の普及を円滑に進める上で大きな助けとなる。本稿では、学生時代の交流を基盤とした人的ネットワークの活用について、筆者の経験を踏まえて述べる。

### 2. 学生時代—他の大学との接点—

筆者は、学部生・院生時代を新潟で過ごし、農業水利学研究室（教員2名、学部生・院生7～8名）に所属していた。他大学で農業土木を学ぶ学生と初めて出会ったのは、スチューデント委員会の企画による海外学生研修旅行（台湾）である。指導教官や研究室の学生と参加して海外の農業土木事情を学んだほか、他大学の教員や院生がどんな研究をしているのか、お互いの情報を交換することができた。このときの交流が呼び水となり、翌年（アメリカ）、翌々年（オーストラリア）の研修旅行や、学会発表や若手懇親会への参加を重ね、農業土木に関わるさまざまな分野、地域ごと話題やその面白さに触れた。横のつながりから学生サマーセミナーの誘いがあり、何回か参加した。開催前からメーリングリストを立ち上げ、テーマの設定などの事前準備を進め、議論が行われた。単発的でありながら、非常に熱の入ったイベントであり、所属研究室のゼミでは滅多に得られない緊張感、充実感があったという印象である。こうした同年代の学生から刺激あるいは衝撃を与えられることにより、比較的近隣にいる有志で勉強会を開催したこともあった。

このほか、「農業土木分野で働く女性の情報ネットワーク整備に関する調査研究」（代表者 松本季子、共同研究者 中野恵子、野崎夏樹、武藤由子）に関わる研究グループ活動の一環として、農業土木に携わる女性をつなぐメーリングリスト（hinakoメール）が立ち上げられた。構成員は学会に所属している院生が中心であり、農業土木分野で働く女性に対して「突撃インタビュー」<sup>1), 2)</sup>を行い、コンサルや官公庁などの業務内容や苦労話を学会誌に寄稿した。また、学会大会の期間中に昼食会<sup>3)</sup>を開催した。当時、農業土木を学ぶ女子学生が増えつつある一方で、卒業後の就職先についての具体的な情報は少ない状況であったことから、こうした情報発信や交流は非常に意義があったと考える。

### 3. 技術者として

筆者が土地改良区に就職すると、学会発表をする機会が少なくなり、学生間の横のつながりとは自然と距離ができた。土地改良区は、受益地区の農家の賦課によって運営されて

---

(独)土木研究所寒地土木研究所, Civil Engineering Research Institute for Cold Region

キーワード：学生，交流，ネットワーク

いるため、職員は農家の利益を念頭に置いて業務を行う。地区内の農業水利についてハード、ソフトの両面に関わることから、農家だけではなく他機関と連携する場面も多い。「一ヵ所で仕事をしていると視野が狭くならないか」と言われたこともあるが、国内外からの視察見学者も多く、対外的な事例発表の機会も多いことから、同業者や研究者など、外部とつながるチャンスはいくらでもある。こうした研究者と技術者をつなぐツールとして、筆者は学会誌に注目している。学会大会へ参加できなくても研究の動向や成果を把握でき、報文や記事によっては顔写真入りで広く情報を発信できる。

#### 4. 研究者として

さて、筆者は昨年に北海道へ移り、大区画水田の灌漑排水に関する調査・研究に携わるようになった。学会との距離が一気に縮まったこともあり、大学や研究機関で活躍されている旧知の方と積極的に情報を交換する機会を持つことを心がけている。

前職とは立ち位置が変わり、研究の成果や得られた技術を普及させることが求められるようになった。調査地区へ成果を還元するのは当然であるが、地域情報や関係機関との連携状況などを把握しきれていない状況である。そのような中で、筆者は同僚の誘いにより、「ひまわり」（農業・農村を考えるレディースネット）と「北のひまわり」（北海道開発局および寒地土木研究所農業基盤研究グループの女性技官・女性研究員の会）へ入会する機会を得た。「ひまわり」は全国的規模の会であり、hinakoメールのメンバーによる突撃インタビュー<sup>2)</sup>でも紹介されている。構成員は約100名であり、年に1回、総会を開催するほか、会報を定期的に配信している。「北のひまわり」の構成員は約20名であり、年に1回、情報の場を設けている。新しい環境に来た筆者にとって、こうしたネットワークで収集する情報は、全国の技官がどのような仕事に取り組んでいるのか、また北海道内ではどのような事業が展開されているのか、農業団体とは違う角度で「農業土木の最前線」を肌で感じることができる。

#### 5. おわりに

地方大学の小さな研究室にいたが、さまざまな企画への参加を重ね、同年代の院生たちと横のつながりを作ることができた。交流を通じて筆者が得たものは、主に二つある。一つ目は、横のつながりができる過程で、議論や質問の仕方を学べたことである。二つ目は、その後、農業土木分野に関して、自分の専門以外のトピックスにも幅広く関心を持てるようになったことである。

しかし、こうした交流をもつ企画は、参加する学生の数、学生が数年で入れ替わること、大学または研究室によって院生の数にばらつきがあり、維持・継続するには相当の労力が必要である。こうして振り返ってみると、学生時代は気軽に参加していたが、企画の裏側に多くの方のお力添えがあったことに気づかされた。

いま、農業土木分野の世界には、多岐にわたる属性や年代の方々がいる。これまでのネットワークを基盤として、自分なりのネットワークを広げていきたい。

#### 参考文献

- 1) 中野恵子,越山直子,清水夏樹,松本季子:突撃インタビュー(農業改良普及員編)編,農業土木学会誌 Vol.68,No.5,pp.94-95(2000)
- 2) 武藤由子:突撃インタビュー(公務員編)編,農業土木学会誌Vol.68,No.12,pp.93-94(2000)
- 3) 崎絵美:第4回”ひなこの昼食会”,農業土木学会誌Vol.69,No.5,pp.82-83(2001)